

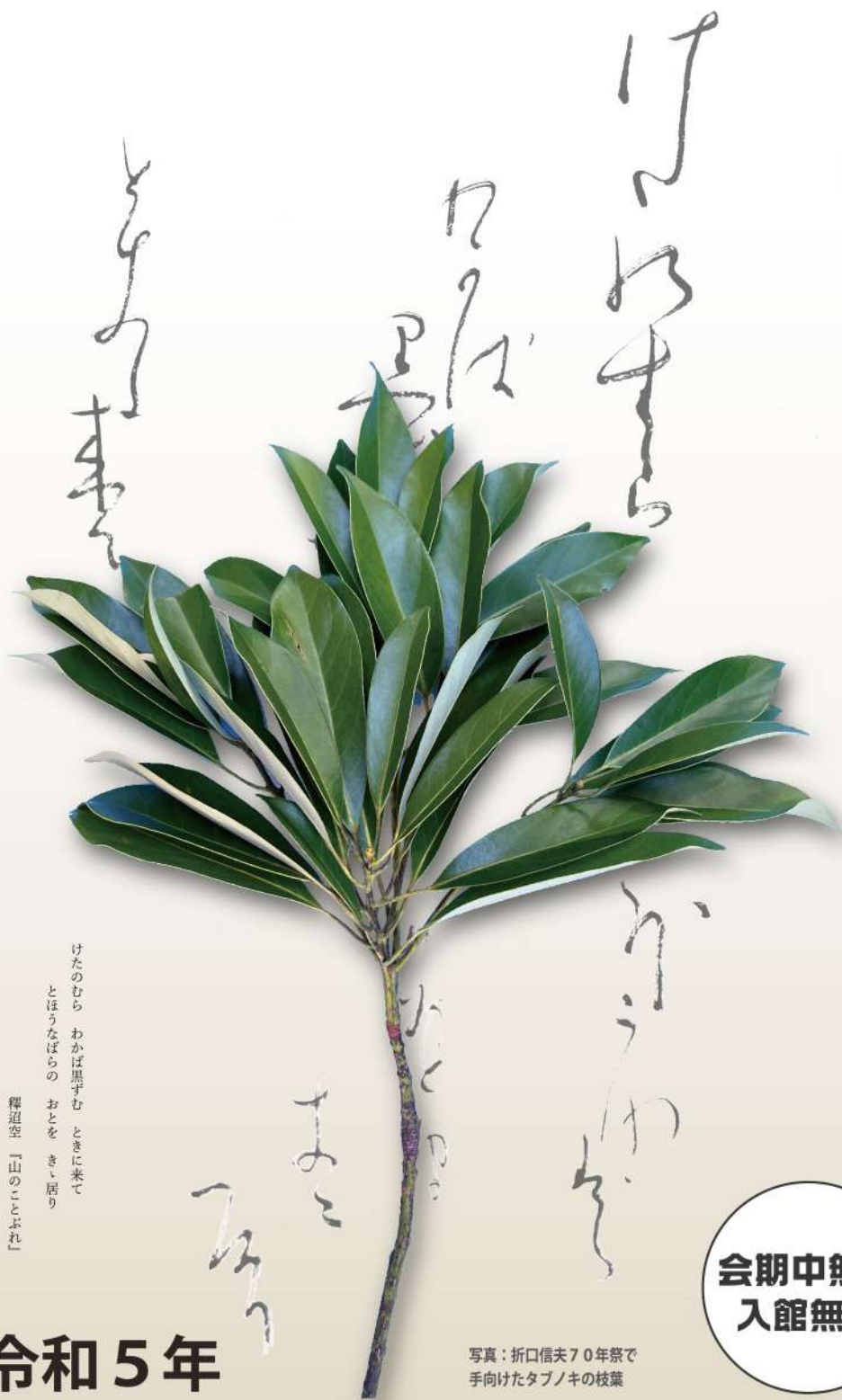
特別展

折口信夫

おりくちのぶ

折口信夫没後70年・羽咋市市制施行65周年記念

がのこしたもの



会期中無休
入館無料

写真：折口信夫70年祭で
手向けたタブノキの枝葉

令和5年

10/14 ± ~ 11/26 日

羽咋市歴史民俗資料館 2階展示室

9:00 ~ 17:00 (入館 16:30 まで)

主催 羽咋市歴史民俗資料館 / 折口父子記念会

はくいしれきしみんぞくしりょうかん Hakui City Museum of History and Folklore

羽咋市歴史民俗資料館 れきみん

〒925-0027 石川県羽咋市鶴多町鶴多田38-1 TEL: 0767-22-5998



文化絢爛 ぶんかけんらん
第38回国民文化祭 第23回全国障害者芸術・文化祭
いしかわ百万石文化祭2023
令和5年10月14日(土)~11月26日(日)

遥空

おりくちしのぶ

折口信夫

明治20年(1887)2月11日生
昭和28年(1953)9月3日没

大阪府木津村に生まれ、幼少時から国文学にとびぬけた才能を発揮し、東京の國學院大學に進みます。万葉集をはじめ古典研究に顕著な業績を残し、多くの民俗採訪(フィールドワーク)の旅をかさね、柳田国男とともに日本民俗学の基礎を築きました。

折口の学問は、古典文学研究と民俗採訪などをもとに見出した「マレビト」「常世」「漂着神」など、国文学や民俗学の領域を超えて、日本人の基層文化を解き明かそうとする「折口学」として知られます。同時に、「釈道空」の筆名で独自の歌風を確立した近代文学を代表する歌人でもありました。

折口は、藤井春洋との出会いにより、羽咋を何度も訪れました。昭和2年に初めて春洋の生家を訪れたのをきっかけに「気多」「海原」「タブノキ」など、この地域の特殊性に注目し、古代研究の論文、多くの歌を残しています。羽咋は、折口の研究や創作活動にとって重要な地のひとつであり、春洋との関係から残された作品や資料も多く、特にゆかりある地といえます。

折口は、春洋を鎮魂する墓をたて、没後、自らも同じ墓に入ります。折口父子は、羽咋の海原の風を受け、今も静かに佇んでいます。

おりくちはるみ

折口春洋 (藤井春洋)

明治40年(1907)2月28日生
昭和20年(1945)3月17日没

一ノ宮村寺家(現在の寺家町)に、気多神社社家の藤井家の四男として生まれ、一ノ宮小学校から金沢の小将町高等小学校へ転校、金沢第一中学校(現在の泉丘高)を経て、國學院大學へ進みます。精悍な顔立ちに、体格にも恵まれた、文武両道の青年であったようです。

大学入学まもなく、先輩らとともに短歌結社「鳥船社」の結成に加わり、折口信夫に師事し、作歌活動を開始します。その後、折口宅に内弟子として入り、生活を共にして講演会や民俗採訪旅行にも同行し、折口の研究を支えながら、自身も創作活動と研究を深めました。

一方で、春洋は、陸軍軍人でもありました。大学卒業後、金沢歩兵聯隊へ入営しますが、1年で除隊し、國學院大學の講師、教授となり学者の道を進みます。しかし、戦争の激化による再召集に応召し、陸軍少尉として激戦地「硫黄島」に着任します。折口は、春洋を養子として入籍し、父子となりますが、激しい戦闘のなかで、春洋は戦死します。

生前、春洋が残した歌は、戦後、折口や門弟らの手によって歌集『鶺鴒が音』として出版されます。この歌集は、折口父子と門弟らとの深い絆を物語るものといえるでしょう。



写真：折口信夫(左)・折口春洋(右) 國學院大學折口博士記念古代研究所 所蔵
昭和5年(1930)3月、藤井春洋(のちに父子となり折口春洋)の國學院大學卒業を記念し、銀座の歌舞伎座の写場(スタジオ)で撮影したもの。

